

嶋田 忠 野生の瞬間 華麗なる鳥の世界

Shimada Tadashi ; Wild Moments The World of Beautiful Birds

2019年7月23日（火）－ 9月23日（月・祝）



《オウゴンフウチョウモドキ》 2008年 作家蔵

開催概要

東京都写真美術館では国際的に評価が高く、現在も第一線で活躍する自然写真家・嶋田忠の個展を開催します。

嶋田 忠（1949－）は、カワセミ類を中心に、鳥獣の写真家として世界に知られています。圧倒的な存在感と神々しいまでの生命力をもったカワセミ、アカショウビンを力強く捉えた作品から、湿潤な日本の風土に生きる鳥獣を、日本画の伝統である「自然から学ぶ」意識と感性に裏打ちされた目で捉えた繊細な作品まで、その多彩な表現は高く評価されています。

本展覧会では、作家の約40年に及ぶ創作活動を概観するとともに、「世界最古の熱帯雨林」と言われるニューギニア島を舞台に、不思議な生態と華麗な姿で人々を魅了する貴重な野生動物たちを紹介します。

2020 オリンピック・パラリンピック東京大会を目前に控えた現在、映像技術の進化はとどまることを知らず、魅力的で多彩な表現への期待が大きくふくらみます。嶋田忠の優れた感性と最新の技術が融合し、人間の知覚を超えて生み出される“奇跡の瞬間”に、どうぞご期待ください。

出品作品

I 〈ふるさと・武蔵野〉思い出の鳥たち 1971-79

農村に生まれた私は、小さいころから人一倍鳥に興味をもっていた。そのころの鳥好きのほとんどがそうであったように、私もまた、野鳥を捕らえては飼育することに熱中していた。それが16歳まで続いたが、かわいがっていた鳥が死ぬたびに、私はむなしさを感じていた。そして高校2年の時、尊敬する母の直面した私は、以後鳥の飼育をきっぱりやめた。

ちょうどそのころ、日本野鳥の会の中西(なかにし)悟堂(ごどう)会長の『定本野鳥記』を手に入れた私は、はじめて「探鳥」ということを知り、野外で鳥を見るということをはじめたのであった。ただ、このころは特別に鳥を研究しようとか、撮影しようなどというつもりはまったくなく、鳥をながめていさえすれば、それで楽しかったのである。佐久にやってきたのも、野鳥天国信州の鳥がじっくり見られるという、ごく気軽な旅であった。それが、千曲川で一羽の宝石のような小鳥に出会った時、私の生きる方向は一変してしまったのである。



《カワセミ》 1971-79年 作家蔵

『カワセミ 清流に翔ぶ』より

II 〈鳥のいる風景・北海道〉 1980-2017



左《キレンジャク》、右上《ミヤマホウジロ》、右下《タンチョウ》
1980-2017年 すべて東京都写真美術館蔵

それを受け入れることのできる鋭い感性。ただ見て写すのではなく、感じて内面で消化し、それから作品を生み出すということをおぼろげながらも知ったのはこの作品とであってからである。

吸収した作品の中で、最も強い影響を受けたのが、あの剣豪として名高い宮本武蔵の作品である。武蔵は数多くの優れた作品を残しているが、その中でも特に傑作と言われる「枯木鳴(こぼくめい)鶉図(げきず)」は、私の最も好きな作品である。縦長の画面を断ち割るように切りつけた一本の線。その線の上にポツンとモズがとまっている。

たったそれだけの水墨画であるが、その作品からはなんともいえない生命力が、こちらを圧するほどに吹き出している。静の中の動、命の宿った景色、自然の与えてく

『鳥のいる風景』より



火の鳥 アカショウビン

カワセミの仲間という、いかにも美しく爽やかな名ハンターというイメージだがこの鳥は違う。水辺というより、むしろ森に住み昆虫や魚はもちろん、カエルもヘビもノネズミも、時には小鳥のヒナまでその巨大なクチバシの餌食としてしまう。生きているものなら何でも食べてしまうのである。

カワセミやヤマセミが陽ならこの鳥は陰だ。薄暗い森にひっそりと生きながら、時として炎のような凄まじいエネルギーを突きつけてくる。

初めて出会った時感じた、あの恐怖にも似た感動の正体は、この鳥独特の狂気なのかもしれない。しかし、なんとも魅力的だ。

カワセミとの対決がスポーツ的だとしたら、アカショウビンはドロドロした果てしない戦いになりそうだった。この鳥と向かい合うと、自分の中に凶暴な闘争心がメラメラと燃え上がってくる。それをすべてはき出し、ぶつけることで、記録を超えた表現の世界に入れそうな気がしたのである。

『火の鳥 アカショウビン』より

《アカショウビン》 1981-87年

東京都写真美術館蔵



闇のカムイ シマフクロウ

カワセミがシャープなコバルトブルーなら、アカショウビンは狂おしい炎の色、ウトナイは重い灰色、そしてシマフクロウは私を包み込んだ闇の黒と、神聖な黄色い眼差し。

シマフクロウを探し始めたのは、北海道に移住して2年目の秋からである。春から夏にかけてはひたすらアカショウビンを捉え、秋から冬はシマフクロウに時間をさくことが多くなった。

当初はそれほどの興味があったとはいえないのだが、アカショウビンの中に自分自身の「カムイ」---すなわち「神」を見いだそうと試み始めたことで、アイヌの人々が、最高の神「コタンコルカムイ」と崇めるシマフクロウにも次第に強く関心を持つようになっていった。なぜアイヌの人々にとってシマフクロウが最大の神なのか、それが自分にとってどれほどのものか。これが私がシマフクロウにとりつかれていく発端だったのである。

『Fish Owl シマフクロウ』より

《シマフクロウ》 1981-87年 東京都写真美術館蔵



IV 〈白の世界〉



凍る^{くちばし} 厳冬のハンター ヤマセミ 2009-14

真冬の北海道は、そこに暮らすものにとって過酷な自然環境だ。

ひとつ判断を間違えれば、死に至る。

支笏湖の水を源にし、冬でも凍らない千歳川。

水温は1-2度でも、地上は氷点下20度を下回り、水滴は瞬く間に凍る。

なぜこんなにも厳しい所に暮らすことを選んだのか。

ヤマセミの生き様は潔い。こちらを見据えるまなざしは力強く、凍てつく中にありながら、あたかも青白い炎をまとっているかのように熱い。

曖昧が許されないぎりぎりの世界だからこそ、美しさはより際立つ。

千歳に移り住んで34年。最初の冬に雪の中のヤマセミを見たときからずっと、この鳥は雪と氷の中でこそ映えると思っている。

『Frozen Bill 凍る嘴』より



《ヤマセミ》2009-14年 作家蔵

雪の妖精 シマエナガ 2010-17

1980年、北海道千歳市に移住して以来、シマエナガはごく身近な鳥。毎年12月、積もった雪が根雪になる頃、我が家の庭に現れます。

それにしても、シマエナガを見ると皆やさしい顔になるのはなぜでしょうか。特に正面を向いた時など「カワイーイ」の連呼、若い女性だけでなく老若男女すべてがシマエナガの虜です。

シマエナガが正面を向いた時、モフモフ羽毛の白く丸い体に、黒い小さな目と嘴だけが浮き上がり、シンプルな造形となります。まるで人形のように愛らしいその姿には、命が宿っているだけにより人の心に深く入り込み、癒やされるのかもしれない。シマエナガと長い付き合いの私としては、正面ばかりでなく、すべてを見てほしいと思いつつも、撮影中ついついこっ

ち向いと念じてしまうのは、私も彼らの虜となっているからでしょう。

『雪の妖精 シマエナガ』より



《シマエナガ》2010-17年 作家蔵

本展初出品



《オジロオナガフウチョウ》 作家蔵



《踊る人々、パプアニューギニア（中央高地）》 作家蔵



《キンミノフウチョウ》 作家蔵



《オオフウチョウ 求愛ダンス》 作家蔵



《フキナガシフウチョウ》 作家蔵



《アオフウチョウ 求愛ダンス》 作家蔵

赤道直下に位置するニューギニア島は鳥たちの楽園である。ニューギニアとその周辺には約 800 種類の鳥たちが生息し、その半分の約 400 種近くがこの地にしかない固有種である。中でもユニークなのが「フウチョウ」と呼ばれる極楽鳥の仲間である。木の実や果実が豊富で天敵となる肉食獣がないこの土地で、極楽鳥は、ひたすら求愛の技を発達させてきた。極楽鳥の多くはその美しさから「森の妖精」と形容されることが多いが、生息地が深い密林の中であるため、その生態の詳細は明らかにされてこなかった。嶋田忠は過去十数回パプアニューギニア島に通い観察撮影を続け、鳥たちの情熱的な求愛ダンスの数々をカメラに納めることに成功した。

本展では、生き物たちの貴重映像を含め、「最後の秘境」とよばれるこの地域で、自然と共生しながら独自の伝統文化や風習を守り続ける人々の暮らしを紹介する。

作家略歴

嶋田 忠 (しまだ ただし)

1949年、埼玉県入間郡大井村（現・ふじみ野市）生まれ。幼少の頃より武蔵野の自然に親しみ、野鳥と共に過ごす。71年、日本大学農獣医学部畜産学科卒業後、動物雑誌『アニマ』（平凡社）創刊に参加、以後フリーランスの写真家として野鳥を中心に独自の表現を開拓している。80年、『カワセミ 清流に翔ぶ』により第17回太陽賞、日本写真協会新人賞を受賞。86年、『火の鳥 アカショウビン』により日本写真協会年度賞を受賞。80年、北海道千歳市に移り住み、以後北海道を拠点に、内外の自然写真を撮り続ける。90年代からは映像作品の制作を手がけ、『エゾモモンガ』によりアメリカ・IBA国際放送広告賞を、『風の王国・生命の森』によりギャラクシー奨励賞（日本放送批評懇談会）を受賞。



関連イベント

連続対談「空の王者、大いに語る」(予定)

- 8月3日(土) 「鳥と生きる」 安西英明(公益財団法人日本野鳥の会主席研究員) × 嶋田忠
8月10日(土) 「陸の覇者×空の王者」 宮崎学(写真家) × 嶋田忠
8月17日(土) 「鳥から学ぶ」 樋口広芳(東京大学名誉教授、鳥類学) × 嶋田忠
入場無料/各回午後2時から/会場:2階展示室前ロビー(定員50名)

特別上映 嶋田忠撮影監督『ダーウィンが来た!』『ワイルドライフ』上映(予定)

- 8月24日(土) 14:00~ 協力:NHK エンタープライズ
アフタートーク 横須賀孝弘(NHK エンタープライズ エグゼクティブ・プロデューサー) × 嶋田忠
入場無料/会場:1階ホール(定員190名)

アーティストによるネイチャートーク

8月中の日曜日、14:00 から 16:00 まで、2階展示室前ロビーにて、出品作家の嶋田忠が自然や写真について皆さんからの疑問にやさしくお答えします。ふるってご参加ください(参加無料)。

サマーナイト・アーティストトーク/手話通訳つきアーティストトーク

8月2日(金)、16日(金)* 18:00~

夏の夜間開館にあわせて出品作家の嶋田忠が本展覧会について語ります。*8月16日(金)のアーティストトークは手話通訳つきで行います。

ギャラリートーク参加の方は、展覧会チケット(当日有効)をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

担当学芸員によるギャラリートーク

毎月第2・4金曜日14:00より、担当学芸員によるギャラリートークを開催します。展覧会チケット(当日消印)をご持参のうえ、2階展示室前にお集まりください。

※事業はやむを得ない事情で変更することがございます。

開催概要

- 主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／読売新聞社／美術館連絡協議会
後援 ふじみ野市／ふじみ野市教育委員会
特別協賛 キヤノンマーケティングジャパン
協賛 ライオン／大日本印刷／損保ジャパン日本興亜／日本テレビ放送網／東京都写真美術館
支援会員
制作協力 NHK エンタープライズ
会場 東京都写真美術館 2階展示室
東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>
開館時間 10:00～18:00 (木・金は 20:00 まで)、ただし、7月25日(木) - 8月30日(金)の木・金は
21:00 まで開館。入館は閉館 30 分前まで
休館日 毎週月曜日ただし、8月12日(月・振休)、9月16日(月・祝)、9月23日(月・祝)は開館
し、8月13日(火)、9月17日(火)は休館。
観覧料 一般 700 (560) 円／学生 600 (480) 円／中高生・65 歳以上 500 (400) 円
※()は20名以上団体、小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害手帳をお持ちの方とその介護者は無
料、第3水曜日は65歳以上無料
※7月25日(木) - 8月30日(金)の木・金17:00-21:00はサマーナイトミュージアム割引(学生・中高生無料、一
般・65歳以上は団体料金)
※9月16日(月・祝)敬老の日は65歳以上無料
※各種割引の併用はできません。

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
図版のトリミング、文字掛け等の加工はできません。

このリリースのお問い合わせ先

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館
1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 www.topmuseum.jp

展覧会担当 関次和子 k.sekiji@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 岡田なつき press-info@topmuseum.jp